

16 世紀イタリアにおける ソマスキ修道会とその孤児にたいする教育活動

前之園 幸一郎

はじめに

イエズス会の存在やイグナチオ・ロヨラの名前はよく知られている。イエズス会はイグナチオによって1534年に結成され、パオロ三世によって1540年に修道会として公認された。そのイエズス会の存在を、われわれはイエズス会士として最初に日本に渡来したザビエルの事跡を通じて、また東京の四谷にある上智大学の名称を通じてよく知っている。

ところがイエズス会とはほぼ同時期に誕生して16世紀のヨーロッパで目ざましい活動を展開したソマスキ修道会の存在とその指導者の聖ジローラモ・ミアーニについてはほとんど知られていない。この修道会は、その注目すべき活動にもかかわらず、たんに外国人であるわれわれにとってだけでなく、本拠地のイタリアにおいても十分には知られていない。その記録がほとんど残されていないからだ。¹⁾そのソマスキ会の創立450年記念が1985年にヴェネツィアで行われた。そして、その際の出版物などを通じて今日ようやく聖ジローラモ・ミアーニへの注目がなされ、ソマスキ修道会の再評価が行われつつある。

最新版の『イタリア大百科事典』によると、SOMASCHIの項目は次のようになっている。

「このソマスキ律修聖職者修道会の名称は、聖ジローラモ・ミアーニ S. Girolamo Miani (エミリアーニ Emiliani の別名もある) によって1528年

(正確には1534年とされている一筆者)に結成がその地で行われた、ベルガモ Bergamo 領域内のソマスカ Somascha 村の名前に由来している。これは、法王パオロ三世によって1540年(正確には1535年だとされている一筆者)に承認され、それに続く法王たちによってさまざまな特典が認められ、特にピオ五世の1568年11月6日の法王大勅書によって諸修道会とならぶ存在のものとされることになった。ソマスキ修道会は聖アウグスティヌスの規律にしたがい、また孤児の救済をその特別の使命としているが、しかしまた、教区の魂の救済や、青少年の教育と薫育にもあたっている。教育の分野では特に実績があり、同修道会の教育を受けてアレッシンドロ・マンゾーニ(ダンテの『神曲』)とならんで民族的古典とされている『いいなずけ』の著者一筆者)やサルヴァトーレ・ローザ(画家として詩人として著名一筆者)のような人々も世に出ている。

ソマスキ会は一時期はイタリアにおいてだけでもヴェネト州やロンバルディア州を中心に60以上の教育施設をもっていた。それらのなかでローマの法王庁にあるコレッジョ・クレメンティーノ Collegio Clementino は有名であった。現在、ソマスキ会は、ローマにサンタ・マリーア・アクイーロの教区、カブランチャ広場にある孤児寄宿学校 Collegio degli Orfani, アヴェンティーノ盲学校 Istituto dei ciechi sull' Aventino などを持ち、その宣教活動を行っている。その外にソマスキ会の教会や諸施設がリグーリア、ピエモンテ、ロンバルディアの諸州やスイス、米国に存在する。この修道会の本拠地は聖ジローラモ・ミアーニが葬られているソマスカに置かれている」(Enciclopedia Italiana)。

ところで小林珍雄氏の『法王庁』(岩波新書、1966年)によれば、修道会にはさまざまなタイプがある。例えば、律修士 Monks による隠遁的な傾向をもつシトー会、トラビスト会のような修道会から、清貧に徹することを目指すドミニコ会、フランシスコ会、カルメル会のような托鉢修道会 Mendicant Orders, さらに司祭と平信徒の助修士とが共住して布教・慈善・学校事業を行うサレジオ会、クララ会のような聖職修道会 Clerical religious congregations などである。

さて、これらにたいして本稿でとりあげるソマスキ会は、イエズス会とならんで、司祭職の聖職者たちの共同生活をその特色としている。そしてその会員は律修聖職者 Regular clerks と呼ばれている。

以上から明かなように諸修道会は、それぞれに固有の目的と活動内容と発展の歴史をもちながら今日にいたっている。われわれは、以下に聖ジローラモ・ミアーニの人物像を通して、ソマスキ会が生まれることになった時代背景、そこで展開された教育活動の内容などを考察し、ソマスキ修道会の果たした歴史的意味について考えてみたいと思う。

I 16世紀イタリアの社会状況とソマスキ修道会の成立

1. “貧者の共通の父親”としての聖ジローラモ・ミアーニ

ソマスキ修道会は1569年までは「貧者たちの下僕修道会」Compagnia dei Servi dei Poveri と自らを称していた。そしてその活動はジローラモ・ミアーニに始まる。

彼は1468年にヴェネツィアの貴族の家柄に生まれた。当時の貴族の家庭の子弟の慣例にしたがい20歳の頃にヴェネツィア共和国の行政官となった。その頃、ヴェネツィアの領土分割を主なねらいとして結成されたフランス、ドイツ、スペイン、法王などによるカンブレ同盟がヴェネツィアを脅かしていたが、ついにその対立はヴェネツィアとの戦争に発展し、その戦闘で1511年ミアーニはドイツ人たちの捕虜となった。それから一月後に彼は解放されて自由の身となったが、この事件を契機に彼に深い精神的変化が引き起こされたといわれている。

ミアーニは、1521年にヴェネツィアに聖ガエターノ・ティエーネ (Gaetano Thiene, 1480-1547) によって設立されていた「神の愛修道会」Compagnia del Divino Amore の慈善活動に参加するようになる。これは不治の病の人々のための病院を中心にして活動を展開しているヴェネツィアの貴族や貴婦人たちをその運動の中心的な担い手とする団体であった。そこでの体験によって彼は

自己の使命を自覚するようになったといわれている。

聖ティエーネは、後にローマ法王パウロ4世の位につくことになる G. P. カラーファ (Gian Pietro Carafa, 1476-1559) とローマにおいて1524年に聖職者の規律と生活の革新を確立するための「神の摂理律修聖職者」Chierici Regolari della Divino Provvidenza 修道会を設立した。この団体に所属する修道士たちはテアティーニ Teatini と呼ばれる。

さて、その数年後にローマは大変な災害に見舞われる。1527年のサッコ・ディ・ローマ事件として知られる神聖ローマ皇帝カール5世の軍隊による徹底的な「ローマの略奪」である。この混乱から逃れるためにカラーファとその修道会会士テアティーニたちがヴェネツィアに避難してきた。彼らとの出会いがミアーニにとっては決定的なものとなった。共和国の上級役人としての生活に埋没し、ボランティアとして片手間に奉仕活動に参加することで満足していたミアーニに、彼らが神という観念を大きく抱かせてくれることになったからである。

1527年を境にしてミアーニはすべての公職から退き、貧民のための救済活動に没頭しはじめる。1527年はイタリア全土にわたって大飢饉の年であった。ヴェネツィア各地においても餓死者が続出した。それにたいする公的機関や行政の救助の施策はまったく機能せず、有効な対策も講じられなかった。このような状況のなかでミアーニの活動が展開された。ミアーニは、まず、貧民たちに自宅を開放して宿を与え、食べ物を与え、衣服を与え、病人の世話をを行った。夜は市内を見回り街頭に放置されている死体を集めて墓地に葬り、また自宅では翌朝配るためのパンづくりに精を出した。そして「この敬虔で聖なる活動のために彼は数日間でその財産を使い果たした」といわれる。

ミアーニは、現在、ヴェネツィア市内の「聖ジョヴァンニと聖パオロ休息の家」Casa di Riposo SS. Giovanni e Paolo のある場所に「ベルサリオ施療院」l'ospedale del Bersaglio を友人と設立した。飢饉の救援や病院不足などの解決は個人の能力を上回る問題であるために彼は有志の義援金に頼ることにしたのである。そこは、ただちにあらゆる悲惨さの救護所となり、貧民、病人、

孤児、捨て子、老女などが収容された。ミアーニによる律修聖職者修道会の最初のきっかけは、1528年にこのようにして始まった。

ミアーニはただ単に不幸な人々を施設に収容することだけで満足しなかった。彼の関心は、特に孤児や捨て子に向けられるようになった。彼は街路や街角にあふれ、放置されたままにいる子どもたちを集め、彼らに将来自立できるための訓練を施すことを考え始めたのである。そのことは「ベルサリオ施療院」の標語としてミアーニが掲げた「人間の物質的な諸々の必要には応えなければならない。しかし精神的、教育的必要や、社会への再復帰も無視されてはならない」ということばに示されている。そしてそこには彼のその後の活動の方向性が凝縮されていた。²⁾

やがて、彼は子どもたちが手仕事に習熟して、その将来の生業となる技を身につけるための工房を開設した。そして彼もその一員となりながら子どもの指導のための教師たちを集めた。かくして1531年はミアーニにとっての更なる転機となる。この年、彼はその地位も財産も家庭も放棄して世の中から見捨てられている子どもたちと生活を共有することを決意し、それを実際に実行に移したからである。ミアーニは世俗的なものの一切を甥たちに委ね、見捨てられた貧しい子どもたちと貧困、食べ物、住居を共に過ごす生活に入った。そして「虐げられた人々の共通の父親」としての歩みを始めるのである。それ以後は、彼の活動は喜捨と托鉢のみによって続けられることとなる。

その当時、ヴェネツィア領域の内陸部にあたる都市ベルガモも悲惨な状態におかれていた。ヴェネツィア出身のベルガモ司教ピエートロ・リッポマーノはヴェネツィアに滞在中の未来のローマ法王カラーファにたいし人材派遣を依頼する手紙を書いた。ベルガモ司教区の窮状と混乱を慈善活動の組織化によって解決するために、その指導者にふさわしい人物が要請されたのである。カラーファは、ただちにミアーニを司教のもとに派遣した。これによりミアーニにとっての神の摂理が準備され、それは実現に向かわせられることになる。

1532年の春、ミアーニは「この世の何物をも携えることなく」ヴェネツィアを出発し、パードヴァ、ヴィチェンツァ、ヴェローナ、ブレシアの都市を経

由して、ついにベルガモに到着した。³⁾途中で彼が行った人々の胸に迫る激しい説教は大きな熱狂を引き起こし、多くの人が援助や施しの申し出を行った。彼はベルガモでは、先ず、孤児たちをサンタ・マリーア・マッダレーナ施療院の一部に収容した。そしてそのなかの女兒の孤児たちを別にして、それをサン・ジョヴァンニ地区の民家に収容した。

彼は、施療院の内外の病人たちの世話や、貧困に苦しんでいる最下層の人々や寡婦たちの救済に奔走し、売春婦たちを説得してその生活を改めるように働きかけた。そしてまた彼女たちが新しい生活に向かうように篤志家の婦人たちの家庭に彼女たちを住み込ませる努力も日常的に行った。さらに近郊の農村地域にも出かけ、民衆がおちいつている最悪の貧困、果てし無い無知と道徳的墮落をつぶさに見聞した。そしてこれに取り組むために、彼はさしあたり青少年を丁寧に教育し、その少年たちと一緒に農村地帯に入り込み、昼間は農民たちと厳しい労働を共にしながら、夜は「福音書の聖なる命」について考えるように農民たちに働きかけた。その少年たちも彼らなりに農民に語りかけ、短い聖歌を教え、農民たちがその日々の苦しい日常生活を和らげるための援助をおこなった。1532年の冬には、短期間ではあったが司教ジベルティに請われてミアーニはヴェローナにも出かけている。売春婦たちの救済のためであった。

1534年の夏には、ついに「貧者たちの下僕修道会」Compagnia dei Servi dei Poveri が誕生することになる。ベルガモの司教リッポマーノは教区民にミアーニの人柄や彼の活動について機会をとらえては語り、彼への協力を訴えていたが、ミアーニ自身も彼の活動の一層の発展のための宗教的組織化の必要性を痛感するようになっていた。各地に彼を支える宗教的なグループが存在していたが、それらは相互に連絡のとれたものではなかった。1533年の年末にミアーニは35人の少年たちを伴ってミラーノ公国領域内に入った。ミラーノは、久しくフランスとスペインとの領有権をめぐる戦場となっており、それに飢饉と伝染病が重なり悲惨この上ない地域と化していた。

ミアーニが先ず着手したのは孤児たちの世話である。彼の貧民たちへの救済活躍に打たれたミラーノのスフォルツァ公フランチェスコ2世は、1534年4

月に領域内の司教、高位聖職者、教会関係者に宛て彼への協力と側面援助を要請している。そのために短時日の間にパヴィーア、コモなどを初めとしてロンバルディア各地に協力者の集団や慈善団体が形成された。

ヴェネツィア共和国とミラーノ公国に広がる各種の慈善団体の統一的中心が必要となった。ミアーニの理念を実行に移し運動を全国レベルで推進していくための統合的組織が求められるに至ったのである。そこで1534年末に、ついにベルガモとミラーノ領とが接する一寒村ソマスカにおいてミアーニによって「貧者たちの下僕修道会」が結成されることになったのであった。

1535年に、ローマ法王庁によるこの修道団体の最初の承認がヴェネツィア駐在法王庁大使ジローラモ・アレアドロによって行われた。

この頃、ミアーニの生活は多忙をきわめ、北イタリア各地にわたる修道会の組織化のために奔走し、カトリック改革に関心をもつ高位聖職者、聖職者、貴族、商人、職人などあらゆる人々の協力体制をかためるための努力を行っていた。1536年にはブレシアにおいて孤児たちのための収容施設「慈悲の孤児院」*l'orfanotrofio della Misericordia* の開設にこぎつけた⁴⁾。しかしながら疲労と痛悔とに憔悴しきっていたミアーニは、1537年2月に、折からソマスカ村を襲っていたペストの病人救護の途中で、彼自身も感染してこの世を去ってしまうのである。

2. 乳幼児の捨て子と養育院

15・6世紀は新生児や幼児の捨て子の世紀でもあった。近年、特にフィレンツェの捨て子と当時の社会的状況についての優れた研究が発表されるようになってい⁵⁾。そのなかの代表的なものの一つにトレクスラーの研究がある。彼によると、子殺しは久しく黙認されていたが都市ならびに教会当局がそのような事態への反対キャンペーンを始めたときから捨て子や養育施設収容児の増大がみられるようになった。そして施設が完備されればされるほど、より多くの捨て子が送り込まれることになった。しかしそれは施設における高い幼児死亡率を考えると子殺しを先にひき延ばすことになったに過ぎない、とされている。

捨て子の理由はさまざまであった。主人と召使や女奴隷との間の私生児、特に女兒は望まれない存在であった。このような子どもたちは社会的に家族の一員として認知されなかったからである。召使の女がその仕える主人の嫡出児に乳母として授乳するために自分の赤ん坊を捨てるように圧力をかけられる場合や、貧しい母親たちがわずかな給金を手にいれるために自ら自分たちの新生児を捨て子にして上層階級の赤ん坊の乳母に雇われる場合もあった。

飢饉や戦争や伝染病による社会的混乱に見舞われると、嫡出児であるか私生児であるかにかかわりなしに捨て子は増加した。しかし親たちはそれを良心の呵責や愛情の一かけらもなしに実行したわけではなかった。将来その子の身元確認の証拠や手がかりになるようにとの親ごころから、ぼろ布の一片やマリア像のメダルやメモの書かれた紙片などが捨て子とともに残されていることが多かった。⁶⁾

フィレンツェには、少なくとも13世紀から捨て子を収容する施設が存在した。それはサンタ・マリーア・ディ・サン・ガッロ Sant Maria di San Gallo として知られている。ついで1316年にサンタ・マリーア・デッラ・スカーラ Santa Maria della Scala が開設された。これらの施設は、貧民、病人、老人、巡礼の途中の行き倒れの者などの救護施設であったが、捨て子もその落ち着き先が確定するまで併せて収容養育されていた。

フィレンツェ都市国家と絹織物ギルドは1419年に捨て子の養育施設の創設を決定した。それは1445年に開設されて積極的な活動を開始する。これがインノチェンティ養育院 Ospedale degli Innocenti の始まりである。これはただちに慈善活動の拠点となりモデルとなった。またブルネッレスキによるその建物は建築史的にも注目され、当時から有名な名所となった。インノチェンティ養育院はその名前の通り「無辜の子どもたち」(innocenti は罪、汚れない、潔白な、という形容詞の名詞化されたことばだ)を収容するための施設として親たちの希望と期待を背負って発足した。しかし多くの子どもが収容されて混雑が始まり、伝染病や乳母の供給不足などがみられるようになると死亡率が上昇し、それはまさに死の宣告の場所になってしまった。

しかしながらフィレンツェの経験はイタリア各地に大きな影響を与えることになった。イタリアの主要な都市においては同様の問題が存在していたからである。

ナーポリにおいては「聖お告げのマリアの聖なる家」Casa Santa della SS. Annuziata と呼ばれる養育院があった。これを運営していたのは「聖霊の白衣修道会」Compagnia dei Bianchi dello Spirito Santo であった。この修道会の主な活動は捨て子や孤児の救護にあった。そして「聖なる家」は養育施設 brefotrofio として運営され、年長児や虚弱児にたいしては教育活動や医療も行っていた。まさにブレフォトロフィオの原点であるブレフォス βρεφος (新生児) のトロフォース τροφός (養育者) としての活動が行われていたのである。この修道会は政府や貴族たちに統制されることなく中産階級の人々によって支えられていた。⁷⁾

ヴェネツィアには捨て子のための養育院として「ピエタ」Pietà が存在していた。それは修道会によって経営され、共和国政府の十人委員会による監督と政府の援助を受けていたが、15世紀の半ばから捨て子の増加と高い死亡率の問題が深刻化していた。

「ピエタ」の報告書によると1466年には460人の乳幼児が収容されていた。1472年にはこの養護施設内の条件改善のために多額の予算の増額が必要だと要望書が出され、その理由として同年に収容児600人が死亡したことがあげられている。1520年代には、さらに厳しい拡張を迫られている。1525年には「ピエタ」で働く乳母たちはそれぞれ一人が4人の乳児に授乳することが求められた。それでいて給金の支給はとどこおりがちであった。この施設は1550年代には規模が一段と大きくなり、収容児、職員、乳母たちを含めて800人から1,200人の人々がそこで生活していたといわれる。⁸⁾

ローマにおいてもさまざまな修道会が捨て子の問題にとりくんだが、その代表的な修道会は「サッシア聖霊修道会」Santo Spirito in Sassia であった。その養育施設では17世紀の初めには40名から50名の乳母が雇われていて、一人の乳母が2名から3名の乳児の授乳を行うように求められていた。この施設

は養育院内での養育を原則としていたが、それは遠方の田舎に住む乳母の所へ新生児を送りだすことに伴う危険を避けるためであり、また田舎の乳母にたいする日常的な監督が不可能であるとの理由によっていた。捨て子だけでなく、生活の困窮から仕方なしに真面目な母親によって預けられた子どもたちも収容されていた。収容児はローマ市内からだけでなく、市外からも送られてきた。ローマ近郊の諸地域の修道会とのネット・ワークができていたからである。例えば、17世紀にフェレンティーノ（ローマから南東へ50キロ位の距離にある町）の聖霊修道会の修道士たちはその地域での捨て子たちを収容し、彼らにそのドゥオーモ（司教座聖堂）で洗礼を授けてからその子どもたちをローマのサント・スピリトの養育施設に送っていた。

しかしながら養育施設内の現実には冷厳な状況にあった。記録によると1580年の初めから1584年11月末までにこの施設に捨て子として収容された新生児の数は3,503人であり、そのうちの2,672人は死亡してしまった。さらに17世紀の報告書は、仮死状態の新生児を40マイルも50マイルもの遠方から長旅をさせてローマの施設に送りどけるために多くの死亡者をだしていることを非難している。17世紀後半からはこのような批判に応えるために、また、さらに増大する捨て子数にたいして施設内の乳母では手が足りなくなったために、その対応策としてサント・スピリト養育院から田舎の乳母のもとに子どもたちはあずけられた。そしてこの過酷な乳幼児期をからくも生き延びた年長児たちのためには、さらに男児、女児それぞれの施設も存在していた。⁹⁾

ボローニャにおいても多くの修道会が捨て子の養育にあたっていた。15世紀に特にその中心的役割を担ったのがサンタ・マリーア・デッラ・ミゼリコルディア（デッラ・カリタとの呼びかたもあった）Santa Maria della Misericordia (o della Carità) 養育院であった。しかしながら1567年から1570年にかけて市内の諸修道会の養護施設を統合した聖ピエトロ・プロコロ養育院 SS. Pietro e Procolo が生まれることになった。これは私生児だけのための収容施設ではなかったが一般に「(哀れな) 私生児の養育院」Ospedale dei (Poveri) Bastardini と呼ばれ、広く知られるようになった。その養育院の規

約の序文によると、この再統合による新たな養育院の組織化は増大する捨て子に対応するためであった。これにより不足がちな経費の節減をはかることが目指されたのである。

この新しい養育院の運営の責任は、ドゥオーモの参事会員、貴族や法律家からなる24名の運営委員会、一名の養育院長によって担われ、実際の活動は修道会会員たちが行った。修道士たちは子どもたちの発育の状態を知るために乳母たちを訪問して歩いたが、それは彼女たちの道徳的敬神的な生活の指導も意図されていた。¹⁰⁾

ベルージャにおいても都市の後援によるサンタ・マリーア・デッラ・ミゼリコルディア養育院 S. Maria della Misericordia が存在した。その残されたもっとも古い記録は1584年のものである。それによると同年の収容児は市内および近郊からの乳幼児223人で、そのうち男児123人、女児100人であった。

これらの子どものなかで、135人については親、教区司祭、あるいは捨て子を発見してこの施設に連れてきた人物によって、その子の身元確認につながるような証言が行われている。また収容児のうちの116人については養育院において洗礼が授けられた。年齢が分かっているか、推定可能な子どもは129人であった。そのうちの71人は生後一ヵ月以内の新生児であり、50人は生後一ヵ月から一年未満の者であった。そして8人が一歳以上の者であった。全体の子どもうちの153人が死亡している。68.6%の死亡率である。彼らは施設の外の乳母のもとに送られ、病気で送り返されてきて養育院で死亡している。¹¹⁾

さて、以上に見てきたようにイタリアの各地に生後間もない新生児の捨て子のための養護施設が宗教団体によって設立されていた。親たちが子捨てを行ったのは、多様な理由からであったが基本的な原因はその極限的ともいえる生活の貧困な状況にあった。

3. 飢饉と伝染病

16世紀ならびに17世紀の初めには、イタリアの大部分の地域が伝染病や深刻な食料危機や戦争による災害に繰り返し見舞われた。特に1520年代から40

年代にかけて、また1590年代にはとりわけその打撃は徹底的なものであった。イタリアが1490年代から1559年まで、フランス、スペイン、ドイツ、スイスの軍隊の侵入による主戦場とされたからである。そのことが災害を一層深刻なものとした。

ペスト、飢饉、戦争はしばしば三つ巴になって襲ってきた。外国軍の兵士たちは食料を略奪し破壊しつくして種まきさえもままならぬ事態をつくりだした。また兵士たちはペストや梅毒、その他の病気を広める役割を果たした。伝染病、とりわけペストへの恐怖は農民を逃亡に駆り立てた。農民の病死や逃亡は翌年の農作業の準備や植えつけを滞らせ、またそれを不可能にさせた。この悪循環は、収穫や生産物の減少をもたらし、結果的に食料不足と飢饉状態をつくりだすことになった。ペストによってひきおこされる悲惨さと混乱はボッカッチョの『デカメロン』で有名であるが、この作品の背景をなしていたのは1348年のペストの大流行であった。その当時から150年間の後も、あいかわらずペストは人々の大きな脅威であり続けた。ペストのもっとも破滅的な大流行は、1522年から28年にかけてイタリア全土に蔓延した時のものだったといわれる。

ペストは、1575年から77年にかけてシチリア、ロンバルディア、ヴェネトの諸州を襲って打撃を与えた。1629年から33年にかけては北イタリア全域が痛手をこうむった。1656年にはローマとナポリに流行した。このようにペストは繰り返し発生しては各地を痛めつけた。その被害の状況についてヴェネツィアの記録はつぎのように語っている。1575年7月1日から1577年2月28日までの間にヴェネツィアで46,721人が死亡した。その次のペストの来襲により1630年7月から1631年10月までの間に、また46,490人が死亡した。1630年8月にはペストによるパニックが最高潮に達し、24,000人がヴェネツィア市内から余所へ逃走してしまった。同様にトスカーナ地方では1622年—28年の人口調査と1632年のそれとの間に17%の人口の減少がみられた。¹²⁾

都市国家政府は、当然の措置として伝染病の蔓延をくい止めるために交易や人の移動に大きな制限を加えた。それは経済的活動の縮小ないし停止をもたらさざるを得なかった。そして、そのことが社会的、経済的混乱を引き起こすも

とになった。このようにして差し迫った緊急課題である食料の供給がストップした。そして翌シーズンの農作業、種まき、除草、収穫も深刻な影響を受けることになったのである。

1598年にヴェネツィアの属領であるチヴィダーレ・ディ・フリウーリ Cividale di Friuri の町にペストが発生した。ヴェネツィア共和国政府はこの疫病をこの町に閉じ込めておくために軍隊を派遣して、町から逃亡する者を射殺するために周囲を兵士で包囲させた。約8カ月間の包囲作戦の結果、ペストの流行は期待通りにくい止めることができたといわれる。伝染病の蔓延を阻止するためにこのように都市を孤立化させ、見殺しにする残酷な方策がとられたのであった。

ペストほど致命的ではなかったが、チブスも伝染病として大きな被害をもたらした。チブスで死亡する病人は感染者の20-40%であったといわれ、ペストの70-80%に比較すると死亡率は格段に低かった。しかしそのことが別の意味で深刻な事態を引き起こした。ペストは家族全員を皆殺しにしてくれたが、チブスで生き残った人間は家族に見守られることなく貧困の悲惨さの中に突き落とされることになったからである。そしてこれらの人々は生き地獄ともいうべき飢餓、食料不足に苦しまなければならなかったのである。

イタリア各地の飢餓状態の発生についての記録や報告の文書類は数多く残されているが、16世紀前半の飢餓の状況に関するものとしてはヴェネツィアの作家マリーノ・サヌート (Marino Sanuto) の記録が知られている。彼は1504年から翌1505年にかけて冬のローマで生活する機会にめぐまれた。その当時ローマは法王ユリウス二世 (在位1503-1513) の君臨する輝かしい時代を迎えていたが、その永遠の都は連日街頭で多くの餓死者が見られる信じがたい状態にあったとサヌートは報告している。¹³⁾

このような戦争や疫病による悲惨な現実が諸修道会の慈善的活動に拍車をかけることになったのである。

II ソマスキ修道会の組織と活動

1. ミアーニの教育的孤児救済の理念とソマスキ修道会の規律

ミアーニは、彼の独自の理論的思想の実現を目指して、あるいは先行するあるお手本の模倣としてその教育活動に着手したのではなかった。むしろ彼の活動は、現実の緊急な事態に触発されながら目前の具体的問題の解決をはかる努力のなかで独創的なものとして展開された。そしてミアーニの活動の根底には「福音書の教え」が貫かれており、そのことが孤児に対するたんなるその場主義的な救済措置への傾斜をくい止め、ミアーニの活動に宗教的、人間的に豊かで一貫した方向性を与えることになった。

すでに見たように、1500年代初期の疫病と破壊と飢餓是最悪の社会的悲惨と不幸をつくりだしていた。ミアーニの目を引きつけたのは、両親を失い、住む家もなければ世話をしてくれる人もいない少年少女たちの問題であった。これらの子どもたちは路上でたむろして暮らすか、混雑する収容施設に詰め込まれるか、の選択しか許されていなかった。さらにたとえ施設に収容されても、そこには男も女も、年寄りも若者も、あらゆる生活困窮者が詰め込まれていて、そこでの生活は飢えをしのぎ病気の世話をしてもらう一時的避難所以上のものではなく、子どもが特別の関心の対象としてとりあげられることはなかった。ましてや彼らにその生活のための訓練や将来にそなえての準備を行うことなどはまったく考えられてはいなかった。

このような現実にたいして、ミアーニは1527年にヴェネツィアのベルサリオ施療院における経験からある試みを開始したのであった。それは、子どもたちを集めて、彼らの生活の場となる家をつくり、そこで孤児たちがもはや味わう機会を失ってしまっている家族的な生活を組織する、そしてミアーニ自身がそこで彼らの父親の役割を担う、という構想にもとづくものであった。彼は、病気の子どもたちを看病し、子どもたちを養育するための食料を調達し、彼らがキリスト教徒として成長し、誠実にその生活を確立できるようになるための教育と手仕事を与える努力を行った。ベルガモ司教 P. リッポマーノの 1533

年の説教によると、ミアーニは「自分自身の手をもって、子どもたちに奉仕しながら、彼らを教育し、神への畏敬に導き、正しく、誠実で、宗教的な生活と会話に向かわせる」意図を明らかにしていた。¹⁴⁾

ミアーニの人間の魅力は、彼の活動にたいする多くの共鳴者や後援者をつくりだした。そしてその活動は各地の協力者の支援によってヴェネツィアを越えて諸都市へと展開されていく。その連帯的な運動の環から、ついに貧民や、見捨てられ野放しにされている子どもたちを人間的な状態のもとに生活させようとする「哀れな孤児たちの下僕」〈*Servi dei poveri derelitti*〉の修道会が生まれることになったのである。

さらにこの修道会を財政的、運営的に支援する世俗的な人々による「孤児たちのための信徒会」〈*Compagnia degli orfani*〉も結成された。つまり、孤児の救済・教育を目的として、聖職者集団による修道会が形成され、それを物心両面から積極的に援助する世俗人による信心会が生まれたのである。そしてこの二つがソマスキ修道会へと発展していくのである。

さて、修道会が団体的な組織として活動するためにはそれを律する規則が必要となる。日常的で多様な問題を解決していく過程でしだいに孤児たちの生活上の規則、修道士たちの行うべき任務、信心会会員の担うべき役割についての規則が確立されていった。初期のものとして「諸活動のための一般的規則」〈*Ordini generali per le opere*〉、「庇護者・代表者信徒会規則」〈*Ordini delle congregazioni di deputati e protettore*〉、「孤児の品行についての規則」〈*Costumi degli orfani*〉の定めが存在した。しかし今日残されているのは前の二つのみで、最後の孤児に関する規則は失われてしまった。

これらの規則は、その後の実践活動のなかで修正され精選されて簡潔なものとしてまとめられた。1620年の「ソマスキ修道会神父たちによって行われる指導に合致する哀れな孤児たちの教育のための規則」〈*Ordini per educare li poveri orfanelli conforme si governano dalli reverendi padri della Congregazione di Somascha*〉は、現存している代表的な資料の一つである。その一節には次のように書かれている。「悪癖を放置したまま成長して、それを

根だやしにすることが困難とならないために、また子どもたちの魂と身体全体の破滅を招かないために、つねに目を見開いて子ども期における粗暴な性癖や悪癖を矯正し、改めるようにせよ。さまざまな教科を学ぶ優れた能力と力をもった子どもたちには文法が教えられねばならない。

キリスト教の要理の他に、すべての者に読み書きが教えられる。能力の優れたものには算数も教えられる。……一人ひとりの子どもがその固有の適性を追求することができ、施設を出た後にその生活を営むことができるように、多様な技術や能力を身につける機会を与える配慮がなされなければならない。¹⁵⁾

同様の方針が「諸活動のための一般規則」にも述べられている。そこでは、指導者は「その適性と能力にしたがって一人ひとりの少年に彼の青春期における相応しい位置を与えるよう努めるべきだ」「*debbono cercare di dar ad ognuno secondo la sua vocazione e attitudine recapito nella sua adolescenza,*」とされ、また「子どもたちが物質的精神的悲惨さから解放されて、美德を身につけ、神の栄光のもとにおける優れた位置が彼らに与えられるように援助すること」「*aiutare le creature fuori della miseria corporale et spirituale, et ornati di qualche virtù darli buon recapito a gloria di Dio.*」が求められた。

孤児の教育の基本原則は、以上のことから明らかなようにそれぞれの子どもの素質、適性、能力に着目して生活のための知識と技を教えながら、キリスト教的な人間の形成をはかることにおかれていた。そしてキリスト教的人間形成とはアニマの教育であり、それは宗教教育を通じて行われた。

宗教教育は、神の御言葉の理解、秘蹟の実践、祈祷、聖母マリアへの帰依、教義問答による人間形成などを原理としていた。強い信仰、慈悲的愛 *carità* の体験、神への揺るぎない信頼がその目標とされた。また望ましい道徳性として求められたのは、誠実さ、善良さ、犠牲的精神、責任感、勤勉さなどの徳であった。共同体的な生活における意志の鍛練によってこれらの目標は追求された。

さらに、そこでは意志の教育と同様に知的な教育も重視されている。当時の

民衆はほとんど文盲の状態におかれていたが、子どもたちはキリスト教徒としての自己教育が可能となるような最低限必要な知識や学力を獲得できるように援助がなされた。彼らに自己の人生を自主的に生きる手だてを与えようとしたのである。

ミアーニは、収容した子どもたちの集団を一つの大家族になぞらえてとらえていた。そしてその集団の中で子どもたちがそれぞれの役割と責任を分担するのは当然のことだと考えられた。その団体的生活の規律の中心となったのが「集会」〈udienza〉である。これは毎日開催された。そして子どもたち全員が出席した。共通の問題、個別の問題はすべてこの集会で議論され処理された。

年長の思慮深い少年たちには特別の任務と役割が与えられた。例えば、もっとも責任ある役目は「監督」〈guardiano〉であった。孤児たちの中から性格が良く、知的にも精神的にも活発だと見なされた少年がこの役目に任命され、集団の指導的存在とされた。その「監督」は仲間が規則を履行するよう見守り、労働の時間や祈祷の折りの立会人となり、朝の起床の時間の巡視を行い、骨の折れる役割を次々こなさなければならなかった。これは一月交代とされていたが、教師たちの側からすると「監督」のポストに就きうる少年をいかに数多く育てあげるのが大きな関心事であった。

その外に「聖具保管係」〈sacrestano〉や「門番」〈portinaio〉などの係があった。彼らは清掃や屋内の整理整頓の指導・監督を行ったり、仲間の頭髮の清潔についての注意を行った。しかしこの役目は後には修道士たちの仕事とされるようになる。

ミアーニは、かつて「労働、敬神、慈愛がこの活動の基本である」“Il lavoro, la devozione e la carità sono il fondamento dell'opera”と述べたが、その理念は以上に見た諸規則にもとづいて実践に移されたのであった。

2. 教育活動の内容的特色

孤児にたいする働きかけは、まず子どもたちの身体的健康への配慮から始まり、ついで宗教教育、労働、集会、社会生活への復帰などが活動の目標とされ

た。

孤児の養育・救済の出発点は彼らの身体的回復におかれたが、これは言うまでもなく人間としての孤児にたいする関心によるものであった。当時のもっとも一般的な病気の一つは疥癬であった。そしてその予防法と治療法はすでに確立されていた。したがって病人は「すばやい治療と愛とによって」処置された。予防的な配慮としては衛生と清潔さが重視され、虚弱な状態の身体になることを避けるために子どもたちを飢えさせないように注意が払われた。ミアーニ自身の書簡のなかでも「食い意地の張った子どもに育ててはいけませんが、飢えさせたままにしておいてもいけない」と述べられており、「一般的規則」では「小さな子ども」「労働に従事している少年たち」「年長の者たち」のそれぞれの必要に応じて食事は与えられるべきだ、とされている。¹⁶⁾

子どもたちにたいする全面的な人間形成は、当然のことながらカトリック要理の教育を中心において考えられた。そして後に見るようにミアーニはカトリック要理の教授法の発展の歴史においても大きな貢献をすることになる。

当時は、聖職者としての基本的教養を欠き、公教要理などにはまったく無関心な司祭も多数存在していたといわれる。そのような時代風潮のなかでソマスキ会では毎日カトリック要理の学習が子どもたちにたいして行われた。1549年のソマスキ修道会規約は「(子どもたちが) 自分自身にたいしてはもちろんのこと、外出して他人に教えることにも習熟することができるように、われわれの子どもたちにキリスト教要理を教える誠実な努力がなければならない」と定めている。¹⁷⁾そして、そこでの教育方法は学習したことを仲間たちの前で復唱する方法と対話法であった。

ミアーニ自身は、すでにその活動の初期に孤児たちを小さな教理問答教師に育てあげていた。彼の伝記作家は、彼が「自分の身近にキリスト教的生活において訓練された何人かの子どもを持っていて、その子どもたちと一緒に田舎の家々を歩き、百姓たちを福音書の聖なる生活に導いた」と述べている。¹⁸⁾

このようなミアーニの宗教教育のねらいにあわせて、その教材として彼の信奉者たちによってさまざまな入門書がまとめられた。1568年にバヴィーアで

出版されたアンジェロ・マルコ・ガンバラナ (Angelo Marco Gambarana) の『孤児たちの勤行のための栄光に満ちた聖母マリア賛美の対話』〈Dialogo in lode della gloriosissima Vergine Maria raccolto per essercitio de li orfanelli〉もその一つである。しかしながら16世紀の宗教教育の入門書の代表的なものはドメニコ会士レジナルド (Reginaldo) による『簡易キリスト教教育』〈Utile et breve istruttione christian〉であったといわれる。これにはわざわざ「孤児たちの使用のための」〈per uso degli orfani〉と副題まで添えられていた。これはまさにミアーニの助言によって編纂されたものであらうと見られている。ミアーニの宗教教育の実践が評判となり、それを参考にして16世紀には他にも教理問答教科書が著されている。アグスティノ・バリリ (Agostino Barili) 神父による主祷文や天主の十戒に関する対話の教科書などがそれである。

さて、『簡易キリスト教教育』の内容は、初級の部分と一段進んだ段階の部分の二部から構成されており、第一部では単純で分かりやすい言葉による質問が設けられ、第二部では長い内容の答えを必要とする質問が設けられている。内容的には、十字架の意味、信仰、希望、慈愛、神と隣人への愛、悪徳、天主の十戒、祈り、などが主要なテーマとしてとりあげられている。¹⁹⁾ 宗教教育はこのカテキズムの教育とともに子どもたちの生活全般を通じて行われた。

さらに、孤児たちにたいする教育のかなめとして集会が存在した。ソマスキ会の信徒会の会員の一人であり、世俗人である「主任教育係」〈Com messo〉に指導されてこの集会は毎日開かれた。彼は子どもたちの行動や素質を「慈愛と配慮をもって」見守り、適切な指導と関与を行った。

「一般的規則」によると、集会においては主祷文の朗読のあと「施設の内外で犯したさまざまな罪について、子どもたちはその過ちを思慮深く諫められる。自ら自分自身を咎める者はわずかな痛悔 (con poca penitenza) で赦されるが、番人や同輩から非難される者は犯した罰に応じて慈悲をもって (con carità) 罰される。その罰は自らを改めるためのものであり、また他人を参考にするためのものである。罰は懲らしめではなく、改善のためのものであり、善へ向

かうためのものであるとされて「寛大に」〈con clemenza〉に与えられた。これは子どもたちの日々の生活の反省の機会となった。

集会においては、また日々の生活上の問題も取り上げられた。そして行うべき行事の計画化、仕事の進捗状況、集団における個人の必要などが討議された。それは団体的な生活を秩序あるものにすることをねらいとしていた。

孤児たちの教育と生活を可能にする基本原理として労働が考えられていた。労働は教育の手段であり、また生活の物質的基礎であるとされたのである。子どもたちは、全員が一日のある時間を労働に当てねばならなかった。「監督」〈sollecitatore〉は孤児たちを彼らにふさわしい労働に従事させた。それは多様な判断基準にもとづいており、子どもの適性、技を教える職人たちの都合、生産物の市場での販売の見通し、子どもが将来選ぶことになる職種の保証などが考慮された。地域や場所によって多様な仕事が存在した。例えばヴェネツィアにおいては鉄製の水差しが生産されており、また羊毛の毛羽立ての技術が開発されていた。ベルガモにおいては麦わら帽子の素材となる編み紐が生産されていた。プレシャは広く帽子の産地として知られていた。子どもたちは将来の職業的自立のために技術を身につけながら、労働を通じてその人間としての形成を行ったのである。

孤児の教育の最終的な目標は、彼らの自主的で品格ある社会復帰におかれていた。ソマスキ修道会はそのために背後から様々な援助を行った。孤児が18歳に達したとき、あるいはそれ以前であっても彼らが生活を支えるのに十分な技術や技を習得した場合には、施設から社会へ巣立っていった。大多数の者は商人や職人のもとで働くことになった。

1556年のミラーノにおける孤児の社会復帰についての信徒会の代表による申合せ事項が今日残されている。²⁰⁾それによると、少年たちはキリスト教的な生活が保証されるような職場に就職することが求められた。そのために孤児を雇い入れる意志を表明した親方についての人物調査が、信徒会代表によって事前に密に行われた。他方、施設を巣立つ少年たちは、その就職が彼らの適性に合致するものであるかどうかを施設の司祭によって確かめられた。

施設から外部に出てからも、少年のその後の生活に対する継続的な配慮が続けられた。信徒会の代表が就職先に度々出かけて行き、その少年がどのように扱われ、どのような霊的状态にあり、身体的健康や手職の習得の進歩の状態はどうであるかを確認した。就職には試用期間としてまず一月が契約されたが、それは主人の極端な懲罰や酷使を防止するためのものであった。

孤児たちのなかに、世俗の世界へ巣立つことなくソマスキ修道会のメンバーとしてとどまる者たちが多数いたのは当然のことである。

3. ソマスキ修道会の組織

ミアーニが孤児救済活動に着手したとき、収容された孤児たちの集団を新しい家族として考えたことについては前に触れた。その家族には日常的に家族全体のすべてを一貫して世話する者の存在が不可欠であった。各地の孤児たちの家族には、この世話係として一人の神父と、一人の世俗人である「主任教育係」〈Com messo〉がいた。その聖職者と世俗を代表する教育係が、家族集団の内部生活についての責任を負っていた。

この司祭は家族集団という身体における魂のような働きをするものと考えられていた。司祭の存在は、身体に意図と行動についての統一と調和を与え、身体全体を生き生きしたものにする中心点だとされたのである。司祭の仕事は、キリスト教徒的生活の単純さを教え、神を賛美することばを語り、聖霊と慈愛をもって告解と聖体拝領の秘蹟を執り行うことにあった。彼は「よき父親」であり、「管理者」であり、「保護者」であって、「主任教育係」と共同して両者の合意によって家族の運営を行った。

「主任教育係」は、教育の分野において万事にわたりもっとも重要な役割を担うポジションであった。早朝の目覚めから夜の休息まで、孤児たちと同じ場所ですでに彼らと接触しながら、そこで繰り広げられる日々の生活にたいして監督と助言を行った。彼は孤児の一人ひとりの行動をこまかく観察し、集団的役割や労働を与え、キリスト教要理の個別的教育を行った。「主任教育係」を支える彼の部下として、食料係、料理人、看護人、清掃係、守衛、寺男、門番、

ランプ係、子どもの清潔を保つ係、力仕事にたずさわる労働係などがいた。

孤児の救済活動を支援する世俗人の集まりとして信徒会が存在していたことは前に見た通りである。この信徒会のメンバーは「代表者」〈Deputati〉と呼ばれた。彼らは多様な都市に広く存在し、その職業も貴族、医者、裁判官、商人、職人などさまざまであり、そのなかには僧侶さえも含まれていた。1538年の段階で信徒会は、ヴェローナ、ブレジャ、ミラーノ、パヴィーア、コモ、ベルガモ、パードヴァ、ジェノヴァに存在しており、その成員の氏名も300人以上にのぼったといわれる。これを記録した文書は「神がどれほどの恩寵をもってかくもさまざまな都市に住む多くの人間を、一つの心、一つの愛に結びつけてしまわれたかを、それぞれの信徒会会員は自覚しなければならなかった」と書き記している。²¹⁾この信徒会の財政的、精神的支援と孤児にたいする愛の活動が、ソマスキ修道会の活動を根底において支えていたのである。

Ⅲ ソマスキ修道会の発展と変容

1. 組織的發展と活動の変質ならびに少女の孤児たちの救済活動

各地の孤児収容施設はそれぞれが一つの家族として精神的、内部的まとまりをもっていた。しかしながら16世紀の終わりになると、ソマスキ修道会の発展そのものがしだいに家族的雰囲気を減少させながら一つの組織的制度としての性格を強めるようになる。初期の頃の燃えるような精神に支えられた活動が、いつしか官僚的、事務的なものへと変化していった。

このような変化をもたらした理由はさまざまあるが、先ずその一つとしてあげられるのは増大する収容児数であった。百人をこえる孤児たちを収容する事態がしばしばみられるようになると、子どもにたいする個別的で丁寧な指導や助言はほぼ不可能となった。さらにソマスキ修道会そのものの新しい方針が変化をひきおこすことになった。ソマスキ修道会の基本的力点がしだいに聖職者集団としての聖職主義におかれるようになったからである。これは信徒会との関係にも変化を与えることになる。そしてその結果、組織の中での役割分担が

固定化し、それまでの活動全体を見渡してそれぞれの立場から全面的に活動に参加する姿勢から分化された部分的分担主義へと活動のスタイルが変化していった。

信徒会の会員たちは、活動のための経済的懸念を最優先課題と見なすようになり、実質的な子どもの教育にかかわる問題よりも、財産としての施設の管理や運営の問題に熱意を示すようになる。したがって、修道士たちは、従来自らの家と感じていた孤児たちの収容されている施設をよそよそしい場所としか感じなくなり、子どもたちもその住人ではなくまさにお客になってしまった。

このような組織的発展にともなう内部的変化によってソマスキ修道会は転機を迎えることになる。

さて、ミアーニは敬虔なる尼僧たちによる孤児の少女たちの教育施設の開設も意図していた。ミラーノのサンタ・カテリーナ女子孤児院の1583年に作成された規則から、われわれはその初期の活動を知ることができる。²²⁾

少女の孤児たちの家では、男子の孤児たちの場合と同様にそれぞれの性格、能力にふさわしい教育が行われ、将来のために何か手仕事を身につけるよう仕向けられた。そこでの日課は、学習、労働、宗教教育からなり、女性の「監督者」〈Guardiana〉が少女たちの全面的な養育に当たった。それは、男子の孤児の教育に当たった「主任教育係」(Commesso)の仕事に対応するものであった。グアルディアーナは、起床、ミサ、学校、労働、身だしなみ、身の回りの整理整頓などのあらゆる事柄について少女たちの行動を厳しく見守り、指導を行った。読み方の学習や公教要理の教授、お祈りのしかたなどは、尼僧によって行われた。尼僧たちは何人かの少女の学習をまかされて、個別に少女たちを指導した。

16世紀末には教会の典礼に品位を与えるために、音楽の導入が行われ始めた。その音楽教育がソマスキ修道会の少女の孤児施設において発展することになった。それはコンセルヴァトーレ・ムジカーレと呼ばれる音楽学校に発展していくことになる。

2. 孤児の教育から神学校への発展

両親のいない子どもたちの問題は、その深刻さと緊急性からイタリア全土がその対応を迫られていた。各都市はソマスキ修道会による孤児救済活動の評判を聞きつけ、その経験にもとづく援助をソマスキ会に要請してきた。したがってその活動は、ベルガモ、パヴィーア、ミラーノ、ブレシャ、クレモーナ、ローディ、マントヴァ、ヴェネツィア、ヴィチエンツァ、ヴェローナ、フェッラーラ、レッジョ、ピアチェンツァ、ジェーノヴァ、サヴォーナ、ヴェルチェッリ、アレッサンドリーア、ビュッラ、マチュエラータ、シエーナ、ローマ、ナポリの諸都市において展開されることになった。また、人手不足から経験ある一人のソマスキ会士のみを派遣して現地で活動の基礎を築き、活動のための人材養成を現地で行って孤児収容施設の開設を行う試みもなされた。それはフォルリ、モーデナ、レカーティ、ノヴァーラ、クレマなどの都市の場合であった。このようにして北イタリアを中心としてほぼ全土に孤児救済のネット・ワークが整備されつつあった。しかし、この動きにたいしてトレント公会議の後、16世紀の終わりの20年間に大きな変化が起きた。

トレント公会議における経済的に貧しい神学生のための神学校の設立の決定が、ソマスキ会に方向転換を迫ることになったのである。孤児救済のために若者を集め、共同生活を通して彼らに伝道の力を養成したその経験が注目を浴びることになったからである。

1548年にパヴィーアの神父たちは、われわれの都市の聖職者の教育を引き受けてくれるようにとの要請をソマスキ会にたいして行った。それによると「あなたがたが、子どもたちに文字やキリスト教的な諸習慣を教えるのに深い経験をお持ちであることを私どもは知っております。ミラーノやソマスカなどの都市で多くの子どもや聖職者や世俗人たちが教育されていることを承知致しております。そこで、私どもは、あなたがたの慈悲深いやり方にしたがって、教育施設の設立とその運営のために二人の実践家を派遣下さるようにと強い希望を抱くものであります」と述べていた。²³⁾

バヴィーアは1564年にイタリアの司教区としては最初のソマスキ会の援助による神学校を開設することになった。ソマスカにおいては1566年に、その翌年にはアローナに神学校が開かれた。その後、アレッサンドリーア、トルトーナ、ナーポリ、メルフィ、メッシーナ、ラヴェンナ、プレシャ、ヴィチエンツァ、クレモーナ、トレヴィーゾ、ウーディネなどに開設されることになった。

特にヴェネツィアにおいては、ソマスキ会は大司教・神学校と総督・神学校の二つの神学校の設立に専念した。1593年にはトレント神学校の設立に参加した。この三つの学校はナポレオンによる廃止にいたるまでソマスキ会の強い影響力のもとにあった。

さて、ソマスキ会は1580年から1590年の10年間にさらなる変貌と発展をとげ、新たな活動を展開した。孤児院の実績と経験は神学校の開設に発展したが、その神学校の経験はさらに貧民の子弟のための寄宿学校の開設に発展する。ソマスキ修道会は、コーモの枢機卿トロメオ・ガッリオ (Tolomeo Gallio) によって貧民の子弟で才能ある青年たちのための学校の設立を委ねられた。そしてコーモ・ガッリオ寄宿学校 (Collegio Gallico di Como) が設立されることになった。それは1583年に法王グレゴリウス十三世の大勅書によって認可されたが、その中で法王はこの学校の設立の趣旨に注目して次のように述べていた。「彼(枢機卿ガッリオ)は、ひそかに次のように考えていた。コーモの都市ならびに彼の司教区には、能力には恵まれているが家庭の貧困さのために、文字も、学問も、その他の技も学ぶことのできない多くの若者がいる。そのために彼らはあらゆる希望から締め出されてしまって無駄に時間を過ごし、自分にも他人にとっても無用な者となってしまう。さらに由々しいことには、精神的な安らぎに結びつくあらゆる事柄に無知なために、たやすく悪徳に陥っている。もしこれらの貧しい青年たちが、神への畏敬、すぐれた諸習慣、学習を、学校で与えられるならば、彼らは悪から遠ざけられるであろう。ソマスキ修道会は輝かしい成果をもって少年たちを育成する経験を実証しているので、ガッリオ枢機卿はソマスキ会律修聖職者に寄宿学校の開設を委ねたのである」²⁴⁾

ソマスキ修道会はこのようにして中等・高等教育にも従事することになり、教授法の革新を試みることになるが、それはまた新たに論じられるべき問題である。ソマスキ修道会の孤児の救済とその教育にたいする影響力はその後も途絶えることはなかった。

注

- 1) ソマスキ修道会の歴史についてのまとまった文献は存在しない。したがってその教育活動についての研究もほとんど深められていない。ようやく1970年から基本資料集“*Fonti per la Storia dei Somaschi*”がC. Pellegrini 編として出版されはじめている。また1975年にミアーニの書簡集“*Le lettere di San Girolamo Miani*”の三巻本がローマで出版された。
本稿は、生誕500年記念にヴェネツィアの Istituzioni di Ricovero ed Educazione から1981年に出された“*San Girolamo Miani e Venezia*”と *Nuove Questioni di Storia della Pedagogia*, Vol. 1 (La Scuola 1977) 所収の Francesco De Vivo の論文“*I Somaschi*”に全面的に依拠している。
- 2) IRI, *San Girolamo Miani e Venezia, Nel V centenario della nascita*, 1986 の序に“attento ai bisogni materiali dell'uomo, non ne trascurava quelli spirituali, educativi, e di reinserimento nella società”の彼のことが引用されている。
- 3) *Ibidem*, p. 12. “senza alcuna cosa di questo mondo”. とある。身一つで旅立ったのであった。
- 4) M. Tentorio, *Cenni storici sull'orfanotrofio della Misericordia di Brescia*, (Archivio storico dei Padri Somaschi) 5, Roma 1969.
- 5) R. C. Trexler, *Infanticide in Florence: new sources and first results*, ならびに *The foundlings of Florence, 1395-1455*, *History of childhood Quarterly*, 1, No. 2 (1973), pp. 98-116. および pp. 259-284.
- 6) 拙稿, 「十五世紀フィレンツェにおける〈子ども期〉について」『イタリア學會誌』第37号(1987).
- 7) C. F. Black, *Italian Confraternities in the Sixteenth Century*, Cambridge University Press 1989, p. 202.
- 8) *Ibidem*, p. 202.
- 9) S. Pagano, *Gli esposti dell'ospedale di S. Spirito nel primo Ottocento*, *RSRR*, 3 (1979), pp. 353-392. from C. F. Black, *op. cit.*, p. 203.
- 10) M. Fantì, *L'Ospedale e la Chiesa di S. Maria della Carità*, 1981, pp.

- 21-36. from C. F. Black, *Ibidem*, p. 203.
- 11) C. F. Black, *Ibidem*, pp. 203-205.
- 12) *Ibidem*, p. 152.
- 13) *Ibidem*, p. 153.
- 14) G. Landino, *San Girolamo Miani*, Roma 1947, p. 484." cum le proprie mani serviendoli, et educarli et redurli nel timore di Dio et ad uno iusto, honesto et religioso vivere et conversare". cited from *San Girolamo Miani e Venezia*, op. cit., p. 15.
- 15) F. De Vivo, *I Somaschi, Nuove Questioni di Storia della Pedagogia*, vol. 1, La scuola 1977, p. 667.
- 16) 書簡では“El maser non facia golozi li putti, nè non li lasi patir.”とされている。「一般的規則」では“per piccoli, per quelli che lavoravano, per gli anziani”に応じて、食事が与えられる、とされている。
- 17) “che con serietà si attendesse ad insegnar ai nostri putti la dottrina cristiana, così per ben loro, come per poter così abitarli ad uscire fuori per ammaestrare gli altri,”とされている。
- 18) *Vita del clarissimo signor Girolamo Miani gentil houmo Venetiano*, di autore Anonimo, 1, Manchester N. H. 1975, p. 14. from *San Girolamo Miani e Venezia*, p. 23.
- 19) *San Girolamo Miani e Venezia*, op. cit., p. 24.
- 20) *Ibidem*, p. 27.
- 21) *Ibidem*, p. 31. “Ogni fratello doveva essere consapevole di quanta grazia ci ha fatto il Signore di unire tanto numero di persone di città diverse in cuore et una carità.”と記してある。
- 22) Ordini delle putte et orfane del luogo di Santa Caterina di porta Nuova dati da monsignor illustrissimo e reverendissimo cardinale di Santa Prassede arcivescovo di Milano. in *San Girolamo Miani e Venezia*, p. 34.
- 23) *San Girolamo Miani e Venezia*, op. cit., p. 37.
M. Tentorio, Per la storia dei padri Somaschi a Pavia, <Rivista dell'Ordine dei Padri somaschi>, XXXIII (1958), pp. 274-277. からの引用文。
- 24) F. De Vivo, *I Somaschi*, op. cit., p. 672. より引用。

